

## 森の贈り物(5)

『リンバロストの乙女』を中心に

青嶋由美子

### はじめに

ジーン・ストラットン・ポーター(Gene Stratton Porter, 1863-1924)が、『リンバロストの乙女(*A Girl of the Limberlost*)』を出版した1909年頃というのは、欧米の児童文学の流れが変わりつつあるときであった。十九世紀は、ハンス・クリスチャン・アンデルセン(Hans Christian Andersen, 1805-1875)が為し得た近代童話の確立、その延長線上に誕生した空想物語=ファンタジーの系譜、さらには、大人向けの近代小説の出現に伴い児童文学の領域にも、「小説」の形態が見られるようになった時期であった。そしてその変化を受け、二十世紀前半には、『エヴリディ・マジック(平凡な日常生活の中にマジックが起きるが、そのマジックの威力は限定されている)』を含むファンタジー、『タイム・ファンタジー(過去と現在の時間が入り混じる)』といった類いの空想小説が興隆期を迎え、ファンタジーの幅を広く、興行きを深くしていった。また、アーサー・ランサム(Arthur Ransome, 1884-1987)に代表される冒険小説では、子供達の日常生活の中での冒険が描かれ、それは、冒険の要素を取り入れた『ごっこ遊び』の世

界でもあった。子供達のための優れた探偵小説も、登場するに至った<sup>1)</sup>

このような変化の時代にあって、尚、ポーターが描いていたのは、善なる精神を良しとするプロテスタンティズムにのっとり、伝統的な家庭少女小説であったのである。それは、或る意味では、非常に旧式なものではあったが、人間の価値が普遍の善によって決まると考えるのであれば、この種の小説は、時代を超えて、人の心に訴える力を持つものとなるだろう。それでは、ポーターが描こうとした少女小説の原形は、一体何処に求められるのであろうか。

少女達が主人公となった小説は、十九世紀後半、勢いを見せるが、その役割は、「貞淑な少女や夫人の閉ざされた生活をよく見せ、なじみやすく感じさせ、実際よりもひろく見せること」<sup>2)</sup>であった。『リンバロストの少女』に繰り広げられる世界は、まさに、広いリンバロスト・スワンプ(湿地)で、自然と共に生きる人々の生活であり、女主人公においては、その荒々しいまでの試練に、立ち向かえるだけの精神・肉体両面での強さを持ち合わせている。邸宅の書斎や居間で寛ぎながら本を読む少女達には縁遠い場所であり、経験であった。実際、この

1) 『児童文学の世界』西本鶏介・他・編、偕成社(1988,東京),pp. 24-33.

2) 『子どもの本の歴史・上』J.R. タウンゼント著、岩波書店(1982:1990,東京),p. 102.

物語に登場する上流階級の娘達には、奥深い森は未知の場所でしかありえないし、その森の中での生活は、時折経験するには構わないが、それを続ける事など思いもよらないであろう。読者も、その自然の恵みを享受する森での生活に憧れはしても、実際の体験で無いことを、心の何処かで知っている筈だ。そのような森を舞台に美しく、しかも、逞しく生きるエルノラのオリジナルは、やはり、『若草物語』(Little Women, 1868-69)の中のジョー・マーチ(Joe/ Josephine March)に在るのだろう。

ジーンが子供の頃『若草物語』を愛読していたことは、既に述べているが、この少女小説は、現在も多くの子供に愛されるアメリカ児童文学の金字塔と言える。不在がちな牧師の父の安寧を願いつつ、母と四人の娘が織り成す家族愛に満ちた物語というのが、一般的な見方であろうか。もはや時代遅れで感傷的で、古めかしい宗教観と説教に満ちているとするのは、あくまでも現代的な捉え方と言えるだろう。

『若草物語』は、二重構造をとった少女小説と読めるのではないだろうか。表面的には、プロテスタンティズムの倫理観に裏打ちされた、何よりも「神」の前で正しくあるとする姿勢が目立っている。父・母を敬い、貧しい人・困っている人に役立つような行いを推奨し、善行は必ず報われるというような描写。何よりも、家庭が、常には教会の役割を果たさねばならないという家庭教育のお手本のような小説である。しかし、実質的な主人であるジョー・マーチの生き方を追ってみると、裏の意味が見えてくる。これには、続編を読むことが必要で

はあるのだが。青春を共に謳歌したローリーの求愛を断り、安楽な人生を排除したジョー。その後、彼女は、原稿を書き、小説家を目指して実家を離れて修行する。結婚はするが、「家に居る可愛いだけの奥さん」にはならない。およそ百年前、「新しい女たち」と呼ばれた自立する女性達の登場に先駆けて、ジョー・マーチが示した女性像は、十九世紀後半を生きる女性にとって非常に魅力的に映ったに相違無い。

更に別の捉え方も有る。エリザベス・ジェインウェイは、『若草物語』の魅力をも、辛辣にこう纏めている。

『若草物語』に登場する少女たちは嫉妬深く、意地悪で、愚かで、怠け者である。そして、この百年間の間、やはり嫉妬深く、意地悪で、愚かで、怠け者の少女たちは、自分自身のことについて書かれたものを読む機会の得られたことを心の底から感謝してきたのである。…百年前、自分の欠点自分だけのものではないことを知ること、どんなに大きな救いであったことだろう。<sup>3)</sup>

このように見てくると、『若草物語』と『リンバロストの少女』の間の共通点や相違点が浮き彫りにされてくる。

共通点の主たるものは、やはり、自立して生きようとする女主人公の姿勢であろうか。困難に立ち向かう時、自力でそれを克服しようとする意志の強さ、感情に振り回されないように、なんとか自分を律しようとする態度、そして、男性に依存する人生を選択しないということ。

逆に、相違点の最たるものは、『若草物語』に認められた家族愛が、『リンバロストの少女』の前半部分では完全に欠如してい

3) 「メグ、ジョー、ベス、エイミー、そしてルイザ」エリザベス・ジェインウェイ、『オンリー・コネクト』岩波書店(1980:1990,東京),pp.37-38.

る点であろう。そしてその原因は、家族という絆に対する倫理観の欠落に在る。

今回の論考では、この家族愛の欠如とその再生について、特に考察を加えて行きたい。

## 森の贈り物

### 母子の絆を取り戻して

親の愛情を得られない子供ほど、世の中に哀れな存在は無いのではないだろうか。たとえ親の代わりに隣人達から降るような愛情を注がれていたとしても。親と子の間柄は、本来ならば、何よりも強い繋がりを持てる関係に育つべきものなのだから。

エルノラは、自分が何故母親の愛情を得られないのかを知らないまま育ってきた。母親は、父親の死で強いショックを受け、そのため、自分に優しく出来ないのだろうと予想している程度である。父親についても、エルノラがまだ乳飲み子の頃、リンバロストの沼で溺れて死んだとしか聞いていない。エルノラが、ヴァイオリンに深い関心を寄せるようになり、それを隣人のマーガレットに告げた時に、初めて、父がかつてヴァイオリンを得意としていたことを知ったくらいであった。思わず父のことを語ってしまったマーガレットに、エルノラは自分の状況をこのように告げる。

I've never seen a picture of my father. I've never heard his name mentioned. I've never had a scrap that belonged to him. Was he my father, or am I a charity child like Billy, and so she hates me?

私はお父さんの写真を見たことが無いわ。名前が話されるのを聞いたことも。お

父さんのものは、欠片だって持っていないし。お父さんは、本当に私のお父さんだったの？ それとも 私はビリーと同じような貰われっ子なの？ それでお母さんは、私のことを憎んでいるの？<sup>4)</sup>

自分には、冷たく当たることの多い母親。その理由を知る術もないまま、肉親の愛情に飢えて育ってきたエルノラは、与えられた小さな手掛かりに縋りつく。マーガレットは、コムストック家の隣人として、この母娘をずっと見続けていた。勿論、エルノラの父親のことも、良く知っていた。実の母でさえも、エルノラには決して告げなかった父親ロバートの姿を、マーガレットは、初めて教える決意を固める。

髪は赤く、眼は青く、恰好の良い頭を持ち、背が高くてほっそりとしていたという外見。一日中冗談を言っているような、茶目っ気に溢れる性格。そして、何よりもヴァイオリンの演奏に優れていたという事。大きな眼を、とても真剣にさせて、演奏の構えを取り、弾き始めれば、そこに潜ませた靈感で、周囲の人を薙ぎ倒すかのようだった事。ヴァイオリンのためには、仕事を疎かにすることもあったし、妻(エルノラの母)を蔑ろに扱うこともあった。<sup>5)</sup>

このような父親の姿を知り、エルノラは、自分のヴァイオリンへの関心のルーツを知った。(実際には、ロバートのそのまた父親、エルノラにとっての祖父も、たいしたヴァイオリン弾きであった。)感受性の強い、そして、音楽に惹かれる心ゆえに、靈感も備わっているらしいエルノラは、その晩、父親が亡くなる時の夢を見た。それは、エルノラの母が目にし、マーガレット自身も見た光景と寸分違わぬものであった。

4) Gene Stratton Porter, *A Girl of the Limberlost* (1909; rpt. New York: Amereon House, 19--), p. 173.

5) *Ibid.*, pp. 174–175.

その夢を見た翌日、エルノラは、それをマーガレットに告げるのだが、ここでの驚異は、夢に現れた父が通った道筋にまつわる事柄である。人目につくのを恐れるかのように、沼近くの道を進んできたロバートは、「カーネイさん」の家の方から来たのだと、エルノラは気付いていた。この「カーネイ」なる人物こそが、父親の死の秘密を明かし、エルノラへの母親の愛を復活させる契機をもたらすのである。エルノラは、その事実を知らないのだが、夢は正確な啓示を彼女にもたらしていた。勿論驚いたのは、マーガレットの方である。偶然の出来事から、ロバートの死に関わる顛末を知っていた彼女は、エルノラの言葉に複雑な表情を見せるしかなかった。

この夢による啓示を受けたエルノラは、母親への気持ちを軟化させることが出来た。父の死を、文字通り目の当たりにしてしまった母親の姿を知り、エルノラにとって、これまで理解不能だった母親の性格や考え方を、許せる気持ちになったのである。

Since her dream Elnora had regarded her mother with peculiar tenderness. The girl realized, in a measure, what had happened. She avoided anything that possibly could stir bitter memories or draw deeper a line on the hard, white face. This cost many sacrifices, much work, and sometimes delayed progress, but the horror of that awful dream remained with Elnora.

夢を見てからは、エルノラは、特別の愛情をもって母親と接するようになった。この少女は、何が起こったのかを多少なりとも悟ったのである。彼女は辛い思い出を掻き立てるようなことや、あの厳しく青白い顔に深い皺を刻ませるような事柄は、出

来得る限り避けるようにした。この事は、多くの犠牲や努力を必要とし、時には進歩を遅らせる結果となったが、あの忌むべき夢の恐怖は、常に、エルノラと共に在った。<sup>6)</sup>

リンバロストの森の恵みを受け取りつつ、エルノラは、母への徒な刺激をもたらさないような高校生活を順調に送って行った。“When her mother neglects her, the swampy forest gives her comfort.(母親は彼女を顧みなかったが、彼女は、沼地の多い[リンバロストの]森から慰撫を与えられていた)”<sup>7)</sup>と評されるように、母親が与えてくれない物を、森から与えられて、エルノラは学業も音楽も満喫しながら日々を過ごしていたのだが、卒業間近、蓄えの不足という事態に直面せざるをえなくなった。現実を見据えるエルノラの眼差しは、うら若い女性のそれとは思えないほどに、厳しく現実的である。

その一方で、作者は、エルノラの母の世間知らずな様子を、やはり金銭面から描き出した。これは、エルノラが、自らの努力と才覚によって日々の糧や学費に繋がる金銭を得た事実の対極に据えられている。エルノラの母親は、決して怠け者といったタイプの人間ではない。むしろ、徹底的に仕事をやるタイプである。それなのに、何故、その労働に見合うだけの報酬を受け取ることがないのか。それは、彼女が、真実を見ていないために、神の恩寵が施されないからである。人間としてあるべき道を歩んでいない登場人物への作者の眼は、断罪しないまでも、時として、非常に厳しいものを含んでいる。作者ポーターは、本来の親娘

6) *Ibid.*, pp. 186–187.

7) “Gene Stratton Porter” (books and writers)  
<http://www.kirjasto.aci.fi/stratton.htm>

関係が取り戻された後のキャサリン・コムストックを非常に美しく、理性的で優しく、また、娘の気持ちを第一とする理想的な母親像として描き直す。その対比を強調したためなのか、本来の姿に戻る以前のキャサリンには、ひどく無慈悲で冷酷な面と、金銭面における異様なまでの無知さと儉約精神とがカリカチュアライズされている。例えば、次のような場面を見てみたい。

... Mrs. Comstock had clung to every acre and tree that belonged to her husband. Her land was almost complete forest, where her neighbors owned cleared farms, dotted wells that every hour sucked oil from beneath her holdings, but she was too absorbed in the grief she nursed to know or care. The Brushwood road and the redredging of the great Limberlost ditch had been more than she could pay from her income, and she had trembled before the wicket as she asked the banker if she had funds to pay it, and wondered why he laughed as he assured her she had. For Mrs. Comstock had spent no time on compounding interest, and never added the sums she had been depositing through nearly twenty years. Now she thought her funds were almost gone, and every day she worried over expenses.

コムストック夫人は、かつて夫のものだったどの土地にも、そして一本一本の木にもしがみ付いているのだった。彼女の土地は、殆どが全くの森で、隣人達はそこに開墾した農場を所有し、彼女の土地の下から、毎刻石油を汲み上げる井戸をあちこちに作っていた。しかし彼女は、自らの哀しみに心を奪われてしまっていたので、そんな事を知りもしなければ、関心を持つこともなかった。ブラッシュウッド街道とリンパロスト大灌漑用水改修への負担費用は、彼女の収入で払える額を超えていると考えた。だから、銀行の窓口で、行員に支払うだけの資金があるのか震えながら尋ねた

時、大丈夫だと請合ってくれた行員が何故笑っていたのか不思議に思いさえしたのだ。コムストック夫人は、複利について考えたことも無かったし、約二十年間も積み立て続けてきた合計額に付け足すこともしなかったのだから。今や、彼女は、資金は殆ど底をついたものと思い、毎日毎日支出について思い悩むのであった。<sup>8)</sup>

現実を直視することなく、何かを知ろうとする姿勢もなく、悪い事態ばかりを考えて苦悩しているキャサリン。夫が残したものを全て健気に守っていこうとする態度は、美しい夫婦愛の発露とも受け取められるだろう。しかし、こうした金銭に対する母キャサリンと娘エルノラとの認識の違いは少しずつ描かれてきていたのだが、衝突の発端となったのは、エルノラが卒業式に着る服であった。人並みの姿で式を迎えたい、入学式のような惨めでみすばらしい恰好で式に臨みたくはないとするエルノラと、そんな必要は一切無いと主張するキャサリンと。エルノラは、母が新しい白い服を準備してくれると信じて安心するが、キャサリンは、既に在る洋服で済ませれば良いと考えている。その態度は、徹底したものであった。

母親の度を越した儉約ぶりのために、高校進学以降も、エルノラは、何度も苦汁を舐めさせられていた。しかし、彼女は、自助努力により幾度も困難を乗り越えてきていた。が、多くの人々の魂を奪ったヴァイオリンの卒業記念演奏会の成功は、コムストック夫人から、欠片ほど残っていたかもしれないエルノラへの思いを奪ってしまったようだった。

The swamp had sent back the soul of her loved dead and put it into the body of the

8) Gene Stratton Porter, *A Girl of the Limberlost* (1909; rpt. New York: Amereon House, 19--), p. 189.

daughter she resented, and it was almost more than she could bear and live.

沼地は彼女(キャサリン)が愛した夫の魂を呼び戻し、自分が腹を立てている娘の身体にそれを吹き込んだのだ。それはキャサリンにとっては、それに堪えて生きることなど出来そうもない程のことだった。<sup>9)</sup>

夫口バートの最期を救えなかったのは、幼いエルノラが居たせいだと思いついてきたキャサリンにとっては、自分が愛した者の魂がエルノラの中にこそ蘇ったことは、苦痛の種としかならなかった。そんな思いに打ちのめされているキャサリンに、自分の体面を考えさせられる機会が次々と訪れる。キャサリンは、結局のところ、エルノラのための新しい服を準備しなかった。それは、彼女流の判断に拠るところであった。穴は空いていない、汚れも無い、だから、その服を身に着けるのに恥ずかしい点など有りはしないという考えである。だから、洗いたての服にしっかりとアイロンをかけて準備を整えておいたのだ。エルノラが求めていたのは、薄く繊細な布地か、或いは、寒冷紗のような優美な素材で作られた白い服であった。仕立て屋に頼めば、全て心得てくれているからと説明もしなかったのではあったが。エルノラは、母の考えを知って、初めて父を求めた。“Oh, father! father!... I need you! I don't believe you would have done this(ああ、お父さん！お父さん！貴方が居て下さったら、こんな仕打ちは絶対になさらなかったでしょうに)”<sup>10)</sup>しかし、悲痛な魂の進りは、母へは届かなかった。伝え合うべき気持ちも言葉も存在していないと悟った娘は、茫然自失の態で家を

出る。自分の行動に誤りがあったことを母が知るのには、その夜、卒業礼拝が行われる教会へ向った時のこと。娘への愛情からではなく、周囲の人間が自分をどう判断するかという心配からである。母は知らなかったのだ、我が娘がどれほど優秀な成績を修め、どれほど同級生に認められた存在であるのかという事を。卒業生入場の先頭に立ち、誰をとっても立派だと思われる程の六十名の同級生よりもさらに素晴らしく思われる女性として育っていたのかという事を。そして、キャサリンは理解していた、もし、エルノラがその事実を語ったとしても、自分から理解するような事は決して無かっただろう事も。それでも、自分の立場が気になるキャサリンであった。そして、キャサリンの内省を促す場面が繰り返されて行く。

For now Mrs. Comstock could see that it was a great occasion. Every one would remember how Elnora had played a few nights before, and they would miss her and pity her. Pity? Because she had no one to care for her. Because she was worse off than she had no mother. For the first time in her life, Mrs. Comstock began to study herself as she would appear to others.

今になってコムストック夫人は、これ(卒業礼拝)が大層な場なのだと分かった。誰もが数日前の夜、エルノラがどんな演奏を披露したかを覚えていよう、そして、彼女がいないことを残念に思い、同情するだろう。同情？ そう、エルノラには誰も面倒を見てくれる人が居ないからだ。母親が居ないよりもずっとひどい状態なのだから。コムストック夫人は、自分の人生で初めて、他人の目にどう映るのかという事を学び始めた。<sup>11)</sup>

9) *Ibid.*, p. 204.

10) *Ibid.*, p. 207.

11) *Ibid.*, pp. 208–209.

礼拝の終わった夜から、エルノラはリンパロストの我が家には戻らなかった。彼女は、礼拝の衣装を整えてくれた鳥の小母さんの家にお世話になることにしたのだ。キャサリンは、流石に懲りていた。自分が為すべき事を果たさなかった場合の結末に恐れを抱き始めていたのだ。翌朝、意を決して鳥の小母さんを訪れたキャサリンは、自分が町で探してきたドレスが既に役立たずとなっている事を知らされる。鳥の小母さんは仕立て屋を自分の家に招き、エルノラのためのドレスを誂えさせていたのだった。自分の家を離れたエルノラには、自分の手が届かぬものであることを、キャサリンは知ったのだ。打ちひしがれてしまうキャサリン。憎しみさえ感じていた筈の娘に、手を払われたとて、一体何が悲しいのだろうか。ここでのキャサリンに見受けられるのは、親であるというだけで子供に影響を及ぼせると信じている親の思い上がりと自己満足である。親は、子供を自分の意のままに出来て当然なのだとする身勝手さが、強く示されている。

Mrs. Comstock turned and trudged back to the Limberlost. The bitterness in her soul became a physical actuality, and water would not wash the taste of wormwood from her lips. She was too late! She was not needed. Another woman was mothering her girl. Another woman would prepare a beautiful dress such as Elnora had worn last night. The girl's love and gratitude would go to her. Mrs. Comstock tried the old process of blaming some one else, but she felt no better.

コムストック夫人は向きを変え、リンパロストへととぼとぼ歩いて戻って行った。魂に広がる苦々しさは、現実には躰への痛みとなった、そして、唇に残るにがよも

ぎの味(苦痛の種)は水を飲んでも洗い流せなかった。彼女は遅過ぎたのだ。彼女は必要とされなかったのだ。別の女性が、エルノラの面倒を母のようにみるのだ。別の女性が、昨晚エルノラが着ていたような美しいドレスを準備してやるのだ。エルノラのアと感謝は、その女性に向けられるのだ。コムストック夫人は、誰か他の人間に責任をなすりつける馴染みの方法をとろうとしたが、上手くいかなかった。<sup>12)</sup>

晴れ着を自らの手で整えてやれなかったキャサリンは、その代わりに、二種類の下着をエルノラに届けた。手織りの麻地に、細かい手の込んだ刺繍が施してあるそれらは、キャサリンが嫁いだ朝、身につけていたものだった。三十センチ以上の長さになたって、やはり手製の飾りひだが付けれられている逸品である。母のことを決して許せないと考えていたエルノラだったが、この贈り物に、張り詰めていた心は一挙に弛んでしまった。そして、リンパロストへ戻る気持ちになったのである。そして一瞬だけ穏やかな親娘関係が築かれたかのように思われる。

カタストロフィーは、すぐに訪れた。原因となったのは、蛹から孵ったばかりの一匹の蛾であった。その蛾は、まだ翅を広げきっておらず、キャサリンの目には、まるで毒虫のように映ったのだった。しかし、その蛾は、エルノラにとっては、大学へ進学するための学費が手に入れられるかどうかを左右する程、大切でしかも珍しいものだった。エルノラが、それを《黄色い帝王蛾》という詩的な名前と呼んでいるくらい、価値の高いものであった。しかし、母はその蛾をタオルで床に叩きつけ、その上を足で踏み躪ったのである。そして、それを止

12) *Ibid.*, pp. 214–215.

めようとしたエルノラの頬をぶった。今こそ絶望の意味を正しく理解したエルノラは、母の娘で在ることを拒否した。

You never have made any pretence of loving me. At last I'll be equally frank with you. I hate you! You are a selfish, wicked woman! I hate you!

お母さんは私を愛してるフリなんてしもしなかった。ようやく、お母さんと同じように遠慮無しでものを言えるわ。お母さんなんか大嫌い！ 自分勝手に底意地の悪いったら。大嫌いよ！<sup>13)</sup>

エルノラが出て行った後、キャサリンは、先刻潰した毒虫を調べて、間違いなく蛾であることを知った。そして、娘が、今まで一度だって嘘をついたことが無かったと気付く。母は、どうやって娘が学資を得ていたかに、ようやく目を向けた。自分がいかに娘に気を配っていなかったか、無関心なままでいたかを悟った。冷淡で無慈悲な母親。それが、自分の今までの姿だったと認めざるを得なかった。そして、心は、娘を受け入れる準備を整え始めていたのである。これまでの親娘関係が神の前に在るのにふさわしい形ではなかったと緩やかな反省を求め出していたのだ。

... there rushed into the heart of the woman a full realization of the width of the gulf which separated her from her child. ... that little crawling creature of earth, crushed by her before its splendid yellow and lavender wings could spread and carry it into the mystery of night, had brought a realizing sense.

... So one of the Almighty's most delicate and beautiful creations was sacrificed without fulfilling the law, yet none of its species ever served so glorious a cause, for

at last Mrs. Comstock's inner vision had cleared.

キャサリンの胸に、自分と娘を隔てる割れ目の広さが実感となって入り込んできた。...あの小さな地面を這っていた生き物。輝くばかりの黄色と薄紫色の翅を広げ、夜の神秘へと飛翔する前に、彼女によって潰された。こそが、覚醒の感覚をもたらしたのだった。

...神の最も繊細で美しい生き物の一つは、自然の法則をまっとうすることなく、犠牲となったが、同じ種類のうちのどれ一つとして、これ程輝かしい目的を達成したものはいない、何故なら、コムストック夫人の内なる幻影は、とうとう取り除かれたのだから。<sup>14)</sup>

上記の抜粋部分は、蛾がこれ以上もなく美しく描写されており、作者ポーターの自然博物学者としての一面が強く窺える個所である。一匹の帝王蛾に、母の再生を託したのだ。リンバロストの森に精通した作者ならではの、蛾というモチーフの使用法である。見事な色の対比を持つ翅に、これからの親娘関係の修復の希望が乗せられているように思われる。そして実際に、思わぬ結果を招くものの、二人の関係が再生するための小道具として、蛾が後ほど用いられる。

一方、エルノラの窮状を知った隣人マーガレット・シントンは、これ以上のキャサリンの横暴を許すまいと約二十年間にわたって秘密にしてきたロバートの死の真相を彼女に告げる。キャサリンが娘を犠牲にしてまで守り抜いたロバートの面影は、実は、それに値しない不実な男の抜け殻にしか過ぎなかったという事を。エルノラが夢に見た通りの道を通って、家に帰ってこようとした夫。彼は、自分が通ってきた道を

13) *Ibid.*, pp. 226-227.

14) *Ibid.*, pp. 228-229.



妻に勘付かれぬようにするため、わざわざ危険な沼に近い場所を選んだのであった。その理由は、不貞を働いていたから、それを悟られないようにするため。沼の向こうに住むエルピラ・カーネイがその相手であった。キャサリンは、その夜、この夫がゆっくりゆっくりと底無し沼に引き込まれるのを見ているしかなかったのである。結婚後一年足らずで、愛し信頼した夫を失ったキャサリンの嘆きがどんなに深かったかは理解しうる。が、ここに来て、ロバートが自分に愛を誓ったのと同じ唇で、他の女性にも愛を囁いていたと知ったキャサリンは、今までの嘆きの日々が無意味だったと気付いたのだった。エルノラとの争いで、心の霧を晴らしたキャサリンにとっては、マーガレットの話は受け入れ易いものとなり、その内容を冷静に判断出来るだけの余裕を持ち得ていたのだった。常に神と共に在るリンバロストの人々は、不貞を許さない。キャサリンとエルノラは知らなかったが、ロバートの相手のエルピラは、その地域の誰からも相手にされていなかったのである。そして、キャサリンとて、例外ではない。夫を許すつもりなど毛頭無い。

エルピラに会って話をし、最後の確認を済ませると、“Once is all any man or woman deceives me about the holiest things of life, I wouldn't touch you any more than I would the black plague. (どんな男性であれ女性であれ、いったん、人生の一番神聖な部分で私を欺いたなら、ペストと同様にその人に触れたいとは思いません)”<sup>15)</sup> とエルピラに告げ、過去への訣別を宣言する。家へ戻ったキャサリンは思い出の後片付けを始める。

夫のことは、もはや、思い出ではなくなつた。忌むべき過去と変わっていったのである。大切に保管してきた夫の衣類。埃がつかないように、虫に喰われないように気をつけて手入れしてきた衣類を、彼女は、夫を呑み込んだ沼に放り投げた。そして、夫と同じように、底に吸い込まれて行くのを眺めたのだった。銃とピストルを除いて、その他の夫に関係するものも、全て、沼に投げ込んで行った。キャサリンの関心は、長い年月の思い込みを離れて、ようやく娘へと向って行くのである。

エルノラは、家へ戻ったものの、母を拒否する。当然、母の心変わりには気付かない。罪の意識に苛まれるキャサリンは、自分が駄目にしてしまった蛾を捕らえるべく、無謀にも、夜のリンバロストの森に出掛けた。盗賊達が跋扈しているその夜の森で、母は、娘に愛情を示したい一心での大冒険の末、二匹の《黄色い帝王蛾》を手に入れる。それが、エルノラにとってどれだけの価値を持つのか、ようやく理解した母にとっては、蛾を捕まえられたことは、至上の喜びとなった。

... Now, I can go home and face my girl.”

Instead, Mrs. Comstock dropped suddenly. She spread the apron across her knees. The moths were undisturbed. Then her tired white head dropped, the tears she had thought forever dried shed forth, and she sobbed for pure joy.

これで、家へ帰って、娘に会わせる顔があるというものだ。

その代わり、コムストック夫人は突然に座り込んだ。そして膝にエプロンを広げた。蛾は動かなかった。それから、彼女は疲れのためか頭を下げた、枯れ果てたと

15) *Ibid.*, p. 236.

思っていた涙が溢れてきて、そして、彼女は純粋な喜びからすすり泣いた。<sup>16)</sup>

戦利品を掲げて家に戻ったキャサリンの姿は、目も当てられない程悲惨な状態だった。スカートは残っておらず、下着は泥だらけ、雨に濡れた髪は紐のように垂れ下がって、足取りも非常に重いものだった。しかし、気持ちの上では、初めて娘のためになる事をしてあげられたという高揚感で満たされていた。出迎えたエルノラも、母の様子が今までとは異なっている事に気付いた。そして、それは、“Elnora, my girl(エルノラ、私の娘や)”<sup>17)</sup> という呼び掛けによって確認となった。母は、自分に目を向けてくれるようになったのだと。

母が、娘を愛さなかったのは、リンバロストの沼に引き込まれた夫を、エルノラが存在に邪魔されて助けられなかった事が理

由であった。リンバロストの森が、この秘密を永遠に明かすことが無ければ、二人の関係は変わる余地もなかった。

しかし、この森に住む貴重な《黄色い帝王蛾》を、母が踏み殺すことで、隠されていた気持ちや秘密が白日の元に引き摺り出されることになった。リンバロストのこの蛾が、今まで修復されないだろうと思われた親娘関係を改めるきっかけを生み出したのである。

森は長い試練の期間を二人に与えたが、それは、第二部での眩しいほどの親娘関係を浮き立たせるための試金石のようなものであった。森は、二人の正常な親娘関係を一旦は奪い、大きな実りへと繋がる余禄をつけて、返してくれたのである。

続く

## BIBLIOGRAPHY

- 1) Primary Source  
Porter, Gene Stratton. *A Girl of the Limberlost*. 1909: rpt. New York, Amereon House, 19--.
- 2) Secondary Sources  
Alcott, Louisa May. *Little Women*. 1868–69:  
Avery, Gillian and Briggs, Julia. *Children and their Books*. 1989: rpt. Oxford, Oxford University Press, 1989.  
Hunt, Peter. *An Introduction to Children's Literature*. Oxford, Oxford University Press, 1994.  
イーゴフ他(猪熊葉子他・訳)『オンリー・コネクト』1980。第四刷。東京,岩波書店,1990。  
西本鶏介・他・編『児童文学の世界』東京,偕成社,1988。  
タウンゼンド(高杉一郎・訳)『子どもの本の歴史・上』1982。第二刷。東京,岩波書店,1990。
- 3) Home Page  
<http://www.kirjasto.sci.fi/stratton.htm>  
[http://www.themestream.com/gspd\\_b.../view\\_article.gsp?](http://www.themestream.com/gspd_b.../view_article.gsp?)

16) *Ibid.*, p. 252.

17) *Ibid.*, p. 255.